

# 神の言葉を聞いて行う

——ルカ8:4-21の釈義的考察——

嶺 重 淑

## 序

新約聖書冒頭の三つの福音書（共観福音書）の成立に関して、まず最初にマルコ福音書が記され、その後、このマルコ福音書とイエスの語録資料（Q資料）を主な資料として、マタイ、ルカ両福音書が執筆されたことは、今日では定説となっている（二資料仮説）。ルカ福音書について言えば、著者ルカは、マルコ福音書とQ資料の他、独自に所有していたと想定される資料（ルカ特殊資料）を用いて福音書を執筆したと考えられている。もっとも、ルカはこれらの資料をそのまま受容したのではなく、それらの内容を精査し、自らの神学的視点から取捨選択し、適宜編集の手を加えつつ採り入れていったのであり、その意味でも、彼は単なる資料の収集者・伝承者ではなく、自立した編集者、神学者であった。

本稿では、マルコのテキストを主な資料として構成されたルカ8:4-21のテキストに注目し、ルカが自らのテキストをどのように構成していったか、その編集作業の検討を通して、ルカの編集の視点を明らかにしていきたい。

## 1. ルカ8章の全体構成

今回扱うテキストの具体的な分析に入る前に、まず、このテキストが置かれているルカ8章全体の文脈及び構成について確認しておきたい。直前のルカ7章においては、弱者に対するイエスの姿勢と業に焦点が当てられていたが、これ

に続く8章では、言葉と業によるイエスの活動が主な主題となっている。8章全体は以下のような構成になっている。

- 序. イエスの宣教と女性たちの奉仕 (8:1-3)
- I. イエスの教え (8:4-21)
  - ①種まきの譬え (8:4-15)
  - ②ともし火の譬え (8:16-18)
  - ③イエスの母と兄弟 (8:19-21)
- II. イエスの奇跡行為 (8:22-56)
  - ①突風を静める奇跡 (8:22-25)
  - ②ゲラサ人の癒し (8:26-39)
  - ③ヤイロの娘の蘇生と長血の女性の癒し (8:40-56)

このように8章全体は、イエスの宣教と女性たちの奉仕について述べる冒頭部(8:1-3)を除くと、今回扱おうとしている、譬え等によるイエスの教えについて述べる前半部(8:4-21)と、自然奇跡、癒し、蘇生等の一連のイエスの奇跡行為を記す後半部(8:22-56)とに区分される。その意味でも、前半部と後半部は内容的に異なっているが、その一方で、前半部においては、神の言葉を聞き、行うことが問題になっているのに対し、後半部は言葉によるイエスの奇跡行為が描かれており、両者は神の言葉という主題において緩やかに結びついている。以下の部分では、この点を念頭に置きつつ、ルカ8:4-21の釈義的検討を試みていきたい。

## 2. テキスト

4 さて、大勢の群衆が集まり、方々の町から人々が彼(イエス)のもとにやって来たので、彼は譬えを通して語った。5 「種をまく人が彼の種をまきに出て行った。そして、彼が種をまいている間に、ある種は道端に落ち、〔人に〕踏みつつ

られ、そして空の鳥がそれを食べてしまった。6 ほかのある種は岩の上に落ち、生え出たが、水気がないために枯れてしまった。7 ほかのある種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びてそれをふさいでしまった。8 また、ほかのある種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。このように話して彼は、「聞く耳のある者は聞きなさい」と声をあげた。

9 そこで、彼の弟子たちは、この譬え〔の意味〕は何であるかと彼に尋ねた。10 すると、彼は言った。「あなたがたには神の国の奥義の知識が与えられているが、他の人々には譬えで〔語られる〕。それは、『彼らが見ても見えず、聞いても理解できない』ようになるためである」。

11 「この譬え〔の意味〕はこうである。種は神の言葉である。12 道端に〔落ちる〕ものとは、聞いても、後から悪魔が来て、信じて救われることのないように、彼らの心から御言葉を奪い去るような人たちである。13 岩の上に〔落ちる〕ものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないために、しばらくは信じて試練の時には見捨ててしまう人たちである。14 そして、茨の中に落ちたものとは、聞いても人生の歩みにおいて、思い煩いや富や生の快樂に覆いふさがれて、実が熟させない人たちである。15 良い土地に落ちるものとは、良い善良な心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」。

16 「誰も、ともし火をともし、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりせず、（そうではなく）入って来る人々に光が見えるように、燭台の上に置く。17 隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、人に知られず、あらわになるに至らないものはない。18 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられる」。

19 さて、彼（イエス）のところに彼の母と兄弟たちがやって来たが、群衆のために彼に会うことができないでいた。20 そこで彼に、「母上とご兄弟たちが、あなたに会おうとして外に立っておられます」と伝えられた。21 すると彼は、「そのことを告げた」彼らに向かって、「私の母、私の兄弟とは、神の言葉を聞いて行う者たちである」と答えた。

### 3. 文脈と構成

今回扱う8:4-21のテキストは、巡回によるイエスの宣教活動とその男女の同行者について記した要約的報告記事（8:1-3）の直後に続いている。冒頭の種まきの譬え（8:4-15）は、①譬え本文（4-8節）、②譬えで話す理由（9-10節）及び③譬えの解釈（11-15節）の三つの小段落から構成されており、譬え本文における四種の種の記述（5b, 6, 7, 8a節）は、解釈部分における四種の種の解説にそれぞれ対応し（12, 13, 14, 15節）、この両者が、譬えで語る理由について述べた中間部を囲い込む構造になっている。また、ルカが資料として用いたマルコ版においては、各小段落が明確に区分されているのに対し、マルコにおける中間部の状況設定部（マコ4:10）や「また、イエスは言った」という解釈部分の導入句（マコ4:13）が省かれているルカにおいては、各小段落はより緊密に結合している<sup>1</sup>。

種まきの譬えに続いて、ともし火の譬えを中心とする一連の比喩的言辞が語られるが（8:16-18）、マルコの並行箇所とは異なり（マコ4:21a参照）、導入部分のないルカの記事においては、直前の譬えとより緊密に結びついており、内容的にも「聞く」という主題によって相互に結びついている。その一方で、前段においては神の国の秘儀性が強調されていたのに対し（10節）、ここではむしろ、神の言葉（神の国）の開示性が強調されている。この段落は、①譬え本文（16節）、②譬えの適用（17節）、③結部（18節）の三つの部分から構成され、①と②はγάρ（なぜなら）という語によって相互に結びつけられ、②は①を根拠づけている。また、マルコ版においては②と③の間に位置するマルコ4:23-24a, cが欠如しているルカ版においては、②と③もより緊密に結びついている。その一方で、これら三つの言葉は内容的には必ずしも相互に関連しておらず、元来はそれぞれ独立した言葉であったと考えられる。

これらの譬えによる教え（8:4-18）に続いて、イエスの母と兄弟たちのイエス訪問について記されるが（8:19-21）、このエピソードを種まきの譬えの直前に置

<sup>1</sup> さらに、9節以降の二つの小段落は、対応表現（τίς αὕτη εἴη ἡ παραβολή [9節] / "Ἔστιν δὲ αὕτη ἡ παραβολή [11節]）によっても結びついている。

くマルコとは異なり（マコ3:31-35）、ルカにおいてこのエピソードは、統一的な主題において結ばれている8:4以降の一連の教えを締め括る機能を果たしている。この段落は、①イエスの母と兄弟の訪問（19節）と②家族来訪の知らせとイエスの反応（20-21節）の二つの部分に区分できる。

ルカ8:4-21のテキスト全体は、以下のような構成になっている。

(I) 種まきの譬え（8:4-15）

① 譬え本文（4-8節）

(a) 状況設定（4節）

(b) 導入句（5a節）

(c) 四種の種（5b-8a節） {道端（5b節）、石地（6節）、茨の中（7節）、  
良い地（8a節）}

(d) 結び（8b節）

② 譬えで話す理由（9-10節）

(a) 弟子たちの問い（9節）

(b) イエスの答え（10節）

③ 譬えの解釈（11-15節）

(a) 神の言葉としての種（11節）

(b) 四種の種（12-15節） {道端（12節）、石地（13節）、茨の中（14節）、  
良い地（15節）}

(II) ともし火の譬え（16-18節）

① 譬え本文（16節）

② 譬えの適用（17節）

③ 結部（18節）

(III) イエスの母と兄弟（19-21節）

① イエスの母と兄弟の訪問（19節）

② 家族来訪の知らせとイエスの反応（20-21節）

## 4. 資料と編集

6:20以降、ルカはマルコ以外の資料（Q資料及びルカ特殊資料）を用いてテキストを構成してきたが（「小挿入」）、8:4以降は基本的にマルコのテキストに依拠しつつ記述を進めている。冒頭の種まきの譬え（8:4-15）は全体としてマルコ4:1-20及びマタイ13:1-23に並行しており（トマス9参照）、ルカはここでもマルコのテキストを唯一の資料として用いたのであろう<sup>2</sup>。資料として用いられたマルコのテキストの内、譬え本文（マコ4:3-9）と解釈部分（マコ4:13-20）は伝承に遡り、特に譬えの中核部分（マコ4:3b-8）はイエスに遡ると考えられるが（IVエズラ8:41参照）、その一方で、両者に挟まれた譬え論（マコ4:10-12）はマルコの編集句と考えられる。また、元来は譬え本文のみで構成され、終末論的な視点を強くもっていたこの譬えを寓喩的に解釈し、強調点を宣教論的なものへ移行させている解釈部分は、マルコ以前に、最初期のキリスト教会において構成されたのであろう<sup>3</sup>。なお、ルカとマタイの間には、比較的多くの共通点が見られ<sup>4</sup>、一部の研究者はこれらの「弱小一致」を、他の資料の存在<sup>5</sup>や口伝からの影響<sup>6</sup>を想定することにより説明しようとしているが、ここはむしろ、ルカとマタイが現行マ

2 一部の研究者は、（特に4-10節に関して）マルコ以外の資料も想定しているが（T. Schramm, *Der Markus-Stoff Bei Lukas. Eine Literarkritische und Redaktionsgeschichtliche Untersuchung*, Cambridge 1971 pp. 114-123; J. Nolland, *Luke 1-9:20*. (WBC 35A), Dallas 1989, p. 377)、根拠に乏しい。

3 根拠については、J. エレミアス『イエスの譬え』善野碩之助訳、新教出版社、1969年、82-84頁参照。一方で、今日でも一部の研究者は、この解釈部分をイエス自身に帰している（I. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978, pp. 323f; Nolland, op. cit., pp. 382f)。

4 例えば、マルコには見られない不定詞 σπείρειν の前の冠詞 τοῦ（5節／マタ13:3）や不定詞 σπείρειν の主語 αὐτόν（5節／マタ13:5）に加え、「聞きなさい」（ἀκούετε）というイエスの呼びかけ（マコ4:3）や ἐγένετο（マコ4:4）、καὶ καρπὸν οὐκ ἔδωκεν（マコ4:7）、ἀναβαίνοντα καὶ αὐξανόμενα（マコ4:8）、τὰ πάντα γίνεται（マコ4:11）、弟子の無理解に関する言葉（マコ4:13）等の欠如、δὲς ἔχει（マコ4:9）に対する ὁ ἔχων（8節／マタ13:9）、οἱ περὶ αὐτὸν σὺν τοῖς δώδεκα（マコ4:10）に対する οἱ μαθηταί（9節／マタ13:10）、καὶ ἔλεγεν ... τὸ μυστήριον（マコ4:11）に対する ὁ δὲ εἶπεν ... γινώσκαι τὰ μυστήρια（10節／マタ13:11）等があげられる。

5 例えば、Schramm, op. cit., pp. 114-123; Marshall, op. cit., p. 318。

6 例えば、H. Schürmann, *Das Lukasevangelium*, I (HThK III/1), Freiburg/Basel/

ルコとは異なる改訂版を用いたと想定すべきであろう<sup>7</sup>。その一方でルカは、このテキストを巡回によるイエスの宣教活動の文脈（8:1）に位置づけ、湖畔の群衆にイエスが舟から教えるというマルコの状況設定（マコ4:1）を、方々の町からやってきた群衆にイエスが語るという設定（4a節）に置き換えた他、マルコの表現を省略／短縮（マコ4:5b-6, 8, 20）する等、編集の手を加えている。

次の16-18節の各部分は随所に並行記事が見られ（マタ5:15; 10:26; 25:29; ルカ11:33; 12:2; 19:26）、「浮動格言」とも呼ばれるが、置かれている文脈によって意味は異なっている。ルカはこの箇所を、マルコ4:21-25を短縮しつつ編集的に構成している。冒頭の16節は基本的にマルコ4:21に依拠するが、Q資料の影響も強く受けており（マタ5:15／ルカ11:33; トマス33b参照）<sup>8</sup>、次の17節もマルコ4:22に依拠しているが<sup>9</sup>、マタイとの間に  $\delta\ \text{o}\acute{\iota}\ (\kappa), \gamma\iota\omega\sigma\theta\eta\acute{\iota}\ (\sigma\epsilon\tau\alpha\iota)$  等の共通語も見られ、ここにもQ資料の影響が認められる（マタ10:26／ルカ12:2; トマス5b-6参照）。マルコ版においては「聞く耳のある者は聞きなさい」（マコ4:23）という命令文がこれに続くが、ルカはこの箇所を、すでに8節で言及したためか（14:35も参照）、あるいは、聞くことの相対的評価のゆえに省略している（マコ4:3も同様）。これに加えて、秤に関する言葉（マコ4:24c）も省略されているが、これもすでに6:38で用いられており、おそらくここでは、内容的に文脈にそぐわないという理由から省略されたのであろう。これに続く18a節はマルコ4:24bに、18bc節はマルコ6:25にそれぞれ依拠している（マタ25:29; ルカ19:26; トマス41参照）。

これに続いてルカは、マルコ4:26-34の内容には触れず、その対応箇所では記載しなかったマルコ3:31-35（マタ12:46-50; トマス99並行）の内容を19-21節に配置している。ルカはここでもマルコのテキストを主な資料として用い、基本的

Wien <sup>4</sup>1990, p. 461; G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas*, I (ÖTK 3/1), Würzburg <sup>2</sup>1984, p. 182; F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III/1), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1989, p. 405.

<sup>7</sup> A. Ennulat, *Die >Minor Agreements<. Untersuchungen zu einer offenen Frage des synoptischen Problems* (WUNT 62), Tübingen 1994, pp. 117-133も同意見。

<sup>8</sup> 一部の研究者は、この言葉をイエスの真正の言葉と見なしている（エレミアス、前掲書、133頁; H.Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 309)。

にその内容を受け継いでいる。また、マタイとルカの間には、ἐσθήκασιν (20b節 / マタ12:47) やマルコの λέγει (マコ3:33) に対する εἶπεν (21節 / マタ12:48) 等の弱小一致が見られるが、それらが両福音書記者の独立した編集作業の結果とは考えにくいことから、おそらく両者は現行のマルコとは異なるマルコの改訂版を使用したのであろう<sup>9</sup>。その一方で、ルカはマルコのテキストを短縮するなど、適宜編集の手を加えつつ<sup>10</sup>、このテキストを編集的に構成している。

以上のことから、ルカはマルコのテキストを主な資料として用い (16-17節ではQ資料も使用)、それを短縮するなど適宜編集の手を加えつつ、この段落全体を構成したのであろう。

## 5. テキストの検討

### 5.1. 種まきの譬え (4-15節)

#### 5.1.1. 譬え本文 (4-8節)

この段落は、イエスが自分のもとに集まって来た大勢の群衆に対して譬えて教え始めたという状況設定によって始められている (4節)。多くの人々が「方々の町から」(κατὰ πόλιν) やって来たことを伝えるこの導入文は、イエスが町や村を巡って (κατὰ πόλιν καὶ κώμην) 神の国を宣教していたと報告する直前の段落 (8:1-3) にこの段落を結びつけている。このように、ここでは群衆が主な対象となっているが、十二人を始めとする弟子たちもこの聴衆の中に含まれていたと考えられる (9, 11節参照)。

5節から譬え本文が始まるが、ルカはここで「よく聞きなさい」というマルコにおけるイエスの冒頭の言葉を省略することによって、「聞きなさい」という言葉によって枠付けられたマルコの枠構造 (マコ4:3, 9) を解消している。さらにルカにおいては、「種をまく人が彼の種をまきに出て行った」というように、「彼

<sup>9</sup> Ennulat, op. cit., pp. 111-114も同意見。

<sup>10</sup> 例えば、19節の παραγίνομαι (やって来る) は新約用例37回中ルカ文書に28回、20節の ἀπηγγέλλω (伝える) は新約用例45回中ルカ文書に26回使用されている。

の種を」(τὸν σπόρον αὐτοῦ) という表現が動詞σπείρειν(種をまく)の目的語として加えられることにより、重心が「種をまく人」から「まかれる種」に移行し、まかれた種の運命、すなわち、イエスが聴衆に語る神の言葉の運命に焦点が当てられている。ここでは、四種の種の運命について語られ、その内の三つが失敗に帰しているが、このような種まきの描写は、誇張されているとはいえ、地を耕す前に種をまくパレスチナの農法を考慮するなら、必ずしもあり得ない状況ではなかったと考えられる<sup>11</sup>。もっとも、その一方で耕してから種をまく状況を示す証言も少なくないことから(イザ28:24-25; エレ4:3参照)、耕す前に種をまくという方法が常にとられていたと断定することはできないであろう<sup>12</sup>。

最初の道端に落ちた種は、踏みつけられ、「空の鳥」(9:58; 13:19; 使10:12; 11:6参照)に食べられてしまう(ヨベ11:11参照)。ルカのみ「踏みつけられる」(κατεπατήθη)という表現が加えられているが(後続の解釈部分には言及されていない)、このような状況は実際には想定しにくく、むしろ、神の言葉に対する敵意(蔑視)を暗示しているのであろう<sup>13</sup>。次の岩の上に落ちた種は、芽を出すのが、水気がないために枯れてしまう(6節)。ルカはここでマルコのテキストを大幅に短縮しており、マルコの「石だらけで土の少ない所に」は「岩の上にと簡略化され(13節も同様)、「土が浅いので」という種が芽を出した理由及び「日が昇ると焼けて」という句は省かれ、さらには、枯れた理由に関して、(正当にも)現状にそぐわない「根がないために」という表現は「水気がないために」に置き換えられている。三番目の茨の中に落ちた種も、同様に実を結ぶには至らなかった(7節)。マルコがその理由として「茨が伸びて覆いふさいだ」と記しているのに対し、ルカは、茨も一緒に伸びてそれをふさいでしまったというように、茨と種が同様に成長した様子を描写している。

11 J. Jeremias, Palästina-kundliches zum Gleichnis vom Säemann (Mark. iv 3-8 Par.), NTS 13 (1966/67) 48-53; E. Linnemann, *Gleichnisse Jesu. Einführung und Auslegung*, Göttingen 41966, p. 121等参照; さらに、『ミシュナ』「シャバート」7:2や『バビロニア・タルムード』「シャバート」73b参照。

12 大貫隆『マルコによる福音書I』(リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ)、日本基督教団・宣教委員会、1993年、228-230頁。

13 Schürmann, op. cit., p. 453.

実を結ぶに至らなかった以上の三つの例とは対照的に、最後の良い地に落ちた種は、生え出て、大きな実りを得るに至る（8節）。マルコが、失敗に終わった三つの例に対応する形で、実りを得た種の様子を、30倍、60倍、100倍と三段階にわたって表現しているのに対し、ルカは100倍の実を結んだとのみ記しているが、これにより、失敗例と成功例とのコントラストがより鮮明に表現されている。100倍の実りは、あり得ないこととは言い切れないとしても（創26:12参照）、やはり異常なことであり、その意味で誇張表現と見なされ、むしろ、読者の目を神の介入の事実へと向けさせる機能を果たしている。そのようにここでは、三度にわたる失敗を十分に補って余りあるほどの最後の成功について述べられている。

この譬えは本来、終末論的意味をもち、様々な障害があっても最終的には豊かに実を結んでいく種の描写を通して、イエスによる宣教活動が困難な状況に遭いながらも進展し、神の国が成長していく様子を示そうとしている。その一方で、この譬え部分を、後続の解釈部分、ひいては4:21節全体の枠組の関連において捉えるならば、すでにこの譬え部分においても倫理的視点が含まれ、神の言葉を聞いて、守り、実を結ぶようにとの要求（15節参照）が含意されていると見なし得るであろう<sup>14</sup>。そして最後にイエスは、「聞く耳のある者は聞きなさい（14:35及びマタ11:15; 13:9, 43参照）と語り、この譬えを締め括っている。

### 5.1.2. 譬えで話す理由（9-10節）

この箇所はマルコ4:10-12に並行しているが、ルカはここでもマルコのテキストを簡略化しつつ叙述している。イエスが種まきの譬えを語った後、弟子たちはその譬えの意味について尋ねる（9節）。マルコの並行箇所では、場面の変更が明示され、イエスが一人になってから十二人の他、周囲にいた人たちがイエスに尋ねたと記され、ここまで聴衆であった群衆はもはやその場に存在しないことが前提にされている。これに対してルカにおいては、直前の譬え部分から

14 Schürmann, op. cit., p. 456; Marshall, op. cit., p. 324.

場面は継続しており、弟子たちが尋ねたとされ、また、確かに群衆は弟子たちの背後に退く形になるが、それでもその場に留まって話を聞いていたことが前提にされている(19節参照)<sup>15</sup>。また、マルコにおいては、弟子たちは譬え(複数)に関する全般的な問いを発しているのに対し(マコ4:10-12)、ルカにおいてはこの譬え(単数)の意味について尋ねられており、その問いに対しては直接ここで答えられるのではなく、後続の11節以降の箇所において答えられることになる。その意味では、この箇所はルカの文脈においては、この譬えの意味について述べる11節以降を導入する機能を果たしている<sup>16</sup>。

ここでイエスは弟子たちに答えているが(10節)、マルコと同様ルカにおいても、このイエスの返答において、イエスの弟子たちとそれ以外の者たちが対照的に位置づけられている。弟子たちは、「あなたがたには」(ὁμῖν)という表現からも明らかなようにイエスと親しい関係にある集団であり、彼らには神の国の奥義を知ることが許されている。マルコにおいては、単にその奥義(τὸ μυστήριον [単数])が打ち明けられている(与えられる)と記されているのに対し、マタイと同様ルカにおいては、その奥義(τὰ μυστήρια [複数])の知識が与えられているとなっているが、ここでの奥義の知識は、閉鎖的集団における秘儀的知恵ではなく、神の国の到来に関わる知識を意味しているであろう。その一方で、他の人々には譬えで(ἐν παραβολαῖς)語られるが、それは彼らが「見ても見えず、聞いても理解できない」ようにするためであると、マルコと同様、イザヤ6:9-10を引用して説明される。ここでは譬えがあたかも人々の理解を妨げるために用いられているように語られているが(ヨハ16:25, 29; シラ39:3参照)、このような理解はイエスが譬えを用いて語ろうとしている文脈には即していない<sup>17</sup>。

事実、神の国の奥義を知り得る弟子集団(内)とそこから排除されているそ

15 M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, pp. 305fに反対。

16 一部の研究者は、ここでの弟子たち(οἱ μαθηταί)の中に直前の段落で言及された女性たち(8:2-3)が含まれていると見なしているが、ルカがそのことを意図していたことを示す明確な根拠は見出されない。

17 そこで、エレミアス、前掲書、6頁は、このギリシア語のπαραβολή(譬え)に相当するアラム語(マトラー)が「譬え」の他に「謎」の意味も持つことに着目し、この箇所(ἐν παραβολαῖς)を「謎のままである」という意味に解しているが、説得的でない。

れ以外の集団（外）とを明確に区別する理解は、イエスの宣教理解に即しておらず、マルコによってこの文脈に持ち込まれたのであろう<sup>18</sup>。もっともルカにおいては、弟子集団の範囲は広げられ、さらに、マルコにおける「外の人々にはすべてが譬えで示される」（マコ4:11）の「外の人々」は「他の人々」に変えられ、「すべてが譬えで示される」の「すべて」は省略されており、両者の対照性は幾分弱められている。さらにマタイと同様ルカにおいては、マルコのテキストではこれに続く「こうして、立ち帰って赦されることがない」（マコ4:12）という引用部分は見られず、その意味でもルカは、弟子たちと区別される他の人々（群衆）の将来的な悔い改めと赦しの可能性を完全には否定していない。もっとも、弟子たちを中心とする人々とそれ以外の人々との区別（民の分化）はルカにおいても明らかであり、弟子たちは神の言葉を聞くだけでなく理解し、それに従い、それを守る存在として捉えられている（8:21; 11:28参照）<sup>19</sup>。

### 5.1.3. 譬えの解釈（11-15節）

譬えで語る理由に引き続き、イエスはここから種まきの譬えの意味について語り始める。この解説部分は9節の弟子たちの問いに対応する答えになっており、その意味でも、群衆はこれ以降は背景に退き、神の国の奥義を知ることが許されている弟子たちに対して、今やこの譬えの深遠な意味が寓喩的解釈を通して示されることになる。ルカはここでもマルコのテキストをもとに自らのテキストを構成しているが、独自の視点から部分的に編集の手を加えることにより、宣教論的視点をさらに強調している。

ルカはまず、マルコの「種をまく人は神の言葉をまくのである」に代えて「種は神の言葉である」と記すことにより、5a節と同様、種をまく人から種そのものに焦点を移行させている。ここでは、まかれる種が神の言葉と同定されてい

18 R. プルトマン『共観福音書伝承史I』（プルトマン著作集1）加山宏路訳、新教出版社、1983年、338頁、注1参照。

19 因みにルカは、使徒行伝の末尾でもイザヤ6:9-10を引用しているが（使28:26-27）、そこでは最後まで引用している（さらにヨハ12:40参照）。

るが、その意味では、イエスは（言及されてはいないが）種をまく人に、そして譬えの聞き手は種がまかれる個々の土壌になぞらえられていると想定できる。もっとも、ルカにおいてはこのような理解は必ずしも徹底されておらず、12節以降の解釈部分においては、（それぞれの場所に）まかれた種は、むしろ個々の聞き手と同定されており、まかれた種の運命は神の言葉の運命でなく、個々の聞き手の運命を示している<sup>20</sup>。

最初の道端に落ちた種は、御言葉を聞いても、悪魔がその人の心から御言葉を奪い去るために信仰に至らず、救われることのない人々を指し示しており（12節）、前出の種を食べる空の鳥（5節）がここでは悪魔（διάβολος [マコ：σατανᾶς]）と表現されている<sup>21</sup>。ルカはここで「信じて救われることのないように」という句を付加しているが、この表現には明らかに初期キリスト教会の宣教活動における苦い経験が反映されており、8:10で省略された「こうして、立ち帰って赦されることがない」（マコ4:12b = イザ6:10）という箇所と関連しているのかもしれない<sup>22</sup>。ルカはまた、マルコにはない「心から」（ἀπὸ τῆς καρδίας）という表現を用いることによって、御言葉は心によって受け止められるべきであることを示している（15節参照）。

二つ目の岩の上に落ちた種は、当初は喜んで聞いて信じるが、根がないために試練に遭うとすぐにそれを捨ててしまう人々を示している（13節）。ルカはここでは「信じる」という動詞を付加し、譬え本文（6節）では省略したマルコの「根がないので」という表現を、ここではそのまま受け継いでいる。ルカはまた、御言葉から遠ざける要素として挙げられているマルコの「御言葉ゆえの艱難や迫害」を「試練」（πειρασμός）に置き換えているが、この変更は、すでに迫害状況のなかったルカの時代の教会の状況を反映しているのであろう。「試練」という概念は、先行する荒れ野でのイエスの誘惑の記事（4:1-13）を思い起こさせるが、

20 Schürmann, op. cit., p. 463 ; Bovon, op. cit., p. 409.

21 因みにルカは、ここまでは常にδιάβολοςを用いてきたが（4:2, 3, 6, 13; 8:12）、これ以降はσατανᾶςを用いている（10:18; 11:18; 13:16; 22:3, 31）。

22 三好迪「ルカによる福音書」『新共同訳 新約聖書註解I』、日本キリスト教団出版局、1991年、307頁。

おそらくルカは、より広い意味で日常的な生活全般に関わる誘惑のことを示しているのであろう<sup>23</sup>。

三つ目の茨の中に落ちた種は、聞いても人生における思い煩い（12:22; 21:34参照）や富や生の快樂にふさがれ、実を結ぶに至らない人々と同一視されている（14節）。ここでルカは、マルコの「欲望」（ἐπιθυμία）を「快樂」（ἡδονή）に置き換え、「人生の歩みにおいて」（τοῦ βίου πορευόμενοι）という表現を付加している。いずれにせよここでは、信仰にとって障害となる要素が現存していることが示唆されているが、おそらくルカの時代の状況が反映されているのであろう。またマルコにおいては、御言葉が覆いふさがれると記されているが、ルカにおいては、御言葉のみに限定されておらず、覆いふさがれる状況がより一般化されている。

最後の実を結んだ種の例においては、神の言葉を聞くだけでなく、それを守り、忍耐して実を結ぶ人々について語られている（15節）。マルコにおいては「御言葉を聞いて受け入れる」とのみ記されているのに対し、ルカにおいては、「良い善良な心で」<sup>24</sup> 御言葉を聞いてそれを「よく守り、忍耐して実を結ぶというように書き換えられている。ここではまた、御言葉を聞くだけでなく、様々な状況においてそれを守り、忍耐して実を結ぶように勧められていることから明らかに、ルカにおいては人間の振る舞いがより一層強調されている。その一方で、マルコにおける30倍、60倍、100倍という三段階の表現は、譬え本文（8節）と同様、ここでも省略されているが、これはおそらく、ルカにおいては、結実の量よりも、個々の人々が御言葉を聞くと共に忍耐してそれを守ることに焦点が当てられているためであろう。

なお、最初の三つの集団は否定的な例として描かれているが、いずれの人間集団も御言葉を「聞いた」ことについては明言されており（12, 13, 14節）、そのこと自体は否定されていない（6:46-49参照）。その意味でも、ルカにおいては単に「聞く」こと自体が問題にされているのではなく、それを越えて、その聞いて

<sup>23</sup> Nolland, op. cit., p. 385.

<sup>24</sup> 「良い善良な心で」（ἐν καρδίᾳ καλῇ καὶ ἀγαθῇ）のκαλός καὶ ἀγαθόςはヘレニズム的な生の理想を表現した概念である（トビ4:15; IIマカ15:12参照）。

た御言葉を守り、実を結ぶことに焦点が当てられている。

## 5.2. ともし火の譬え (16-18節)

種まきの譬えに続くこの箇所では、神の国の神秘の知識を与えられている弟子たちに対して、神の言葉をどのように扱うべきかが示される。すなわち、誰であれ、ともし火をともしたなら、それを器 (σκεῦος)<sup>25</sup>で隠したり<sup>26</sup>、寝台の下に置いたりせずに、燭台の上に置こうとするが、それと同様に、光としての神の言葉も隠されるべきではなく、外に向けて照らし出されるべきである (16節)。ここでルカは、二つの修辞疑問文によって構成されていたマルコの文章を平正文に書き換えると共に、ともし火をともし目的を示す「入って来る人々に光が見えるように」(11:33参照)という表現を付加することにより、彼の宣教論的意図を明らかにしている。すなわち、この「入って来る人々」は、神の言葉を受け取ろうとしている外部の人々 (10節参照)を指しており<sup>27</sup>、弟子たちによる将来の宣教活動が示唆されている。その意味でも、すでにマルコにおいても神の言葉と光が関連づけられていたが、ルカはその点をさらに強化し、光としての神の言葉をさらに他の人々に伝えていくように弟子たちに要求している<sup>28</sup>。なお一部の研究者は、ルカの描写は、一部屋からなるパレスチナの住居とは異なり (マタ5:15)、玄関のある住居が前提にされていると指摘しているが<sup>29</sup>、玄関を伴わない住居であっても「入って来る人々に光が見える」点は同様であり、また寝台に言及されていることから、必ずしもそのように想定する必要はないであろう<sup>30</sup>。

16節の内容は、接続詞 γάρ 及び「光／闇」との関連においてこの節と結びつく直後の17節において説明される。つまり、隠されているものであらわにならな

25 並行箇所のマタ4:21及びルカ11:33では μόδιος (升) が用いられている。

26 エレミアス、前掲書、133頁は、ともし火を器で覆う行為は、火を消す際の通常のやり方であったとして、この箇所を「ともし火をともし、すぐにそれを消す人はいない」と訳出しているが、消された火はもはや隠されている火とは見なせないことから説得的ではない。

27 Schneider, op. cit., p. 187; Fitzmyer, op. cit., p. 718.

28 Bovon, op. cit., p. 46参照。

29 例えば、エレミアス、前掲書、20頁注1。

30 Schürmann, op. cit., p. 467 n. 166.

い（未来形）ものではなく、秘められたもので人に知られないままのものはない。Q資料に由来すると想定される並行箇所（12:2; マタ10:26）では、神の裁きの日に人のすべての秘密があらわになるという主旨で語られているが、ここでは16節の内容を受けて神の言葉の性質に関連づけて述べられており、将来の復活時におけるイエスの本性の開示が示唆されているのかもしれない<sup>31</sup>。なお、マルコとは異なり、ルカにおいては「人に知られず」という表現が付け加えられることにより（12:2; マタ10:26参照）、開示性が一層強調されている。その意味でも、10節で強調されていた神の国（言葉）の秘儀性（閉鎖性）や限定性はここでは明らかに相対化されており、弟子たちにしか知らされていなかった神の国の秘儀（神の言葉）が、あらゆる人々に対してもあらわにされることが示されている。

結びの18節では、まず、正しく聞くようにとの勧告がなされているが、ルカはマルコの「何を (τί) 聞くべきか」を「どう (πῶς) 聞くべきか」に変更することにより、聞いていることを前提としたうえで、聞く対象よりも聞き方に強調を置いている。その意味でこの勧告は、神の言葉を保持し、守ることによって実を結ぶという前段の教えと密接に結びついている。

最後に、持っている者はさらに与えられ、持っていない者は持っている物まで取り上げられるという格言が述べられ、この段落は締めくくられる。この格言は、ムナの譬えの結部にも用いられており（19:26; マタ25:29）、元来は貧富の格差が拡大していく矛盾に満ちた社会状況を指し示す格言であったが、この文脈においては文字通りに金銭等の物質的財産が問題にされているのではなく、転義的に「神の言葉を聞く」こととの関連で理解されている。その意味でも、持っている者は、神の言葉を正しく聞き、豊かに実を結ぶ者に対応し（8, 15節）、持たざる者とは、神の言葉を正しく聞かずに実を結ぶに至らなかった直前の譬えの三種の集団に対応している（5-7, 12-14節）。なお、ルカはここで、持っていない者は「持っていると思っているものまで取り上げられる」と、「～と思っているもの」（ὁ δοκεῖ/+不定詞）という表現を付け加えることにより、彼らが実際

31 Marshall, *op. cit.*, p. 328.

には始めから所有していないことを示している。

### 5.3. イエスの母と兄弟 (19-21節)

19節から場面が変わり、イエスの母と兄弟がイエスを訪問した際の状況について語られるが、彼らは大勢の群衆がいたためにイエスに会うことができないでいたという (19節)。マルコにおいては明らかに家の中での状況を想定されているのに対し (マコ3:20参照)、ルカの文脈においては8:4以降、イエスが戸外で群衆に教える状況が継続しており、(20節の ἔξω [外に] にも拘わらず) ここでも戸外の状況が想定されていると考えられる<sup>32</sup>。ここで言及されている οἱ ἄδελφοί (兄弟たち) は、親類等のより広い意味でも解しうるが、ここでは明らかにマリアの他の子供たちを指している。マルコにおいては、身内の者が「気が変になっている」イエスを取り押さえてきたという記述が先行することから (マコ3:21)、彼らはここでもイエスを連れ戻すためにやって来たものと想定されるが、ルカにはそのような記述は見られず、彼らの訪問の理由は明らかではない。事実この点は、後続の部分で、マルコにおいては彼らがイエスを捜している (ζητέω) と記されているのに対し (マコ3:32)、ルカでは会いに (ἰδεῖν) 来たと表現されていることにも対応している。また、マルコでは、母と兄弟たちは、自分たちから入って行ってイエスに会おうとはせず、人をやってイエスを呼ばせているが、ルカにおいては、彼らは (イエスに会おうとしたが) 群衆がいたために会えなかったと記されている。その意味では、ここでもルカはイエスの母や兄弟たちをマルコほど批判的には描いておらず、さらに、マルコにおいては、戸外に立っている母や兄弟たちとイエスの周囲に座っている人々とは明らかに対照的に描かれているのに対し (マコ3:31-32a)、ルカにおいては両者の対比は曖昧になっている。

そこでイエスに、彼の母親と兄弟たちが会おうとして外に立っていると告げられるが、それを聞いたイエスは、そのことを知らせた人々に向かって、「私の母、私の兄弟とは、神の言葉を聞いて行く者たちのことである」と答え<sup>33</sup>、イエスの

32 Klein, op. cit., p. 311に反対。

33 ルカ11:28の「幸いなのはむしろ、神の言葉を聞いて守る人である」も参照。

母と兄弟の新しい定義を提示している（21節）。マルコにおいては、このように返答する前に、イエスはまず「私の母、兄弟とは誰か」と辛辣な問いを発した上で、周囲の者を見回して「見よ、ここに私の母、兄弟がいる」と述べており、イエスの親族と周囲の人々との対比を強調しつつ、前者ではなく後者が自分の家族であると明言している（マコ4:33-34; マタ12:48-49も同様）。それに対して、ルカにおいてはこの部分が省略されており、その意味では「イエスの真の母、兄弟」は必ずしも周囲の者たちに限定されておらず、ルカはここでも、イエスの母、兄弟たちに対するマルコの批判的な視点を和らげている<sup>34</sup>。さらに、マルコでは、**神の御心を行う者こそが私の兄弟、姉妹、母である**とイエスが述べているのに対し、ルカのイエスは、**神の言葉を聞いて行う者たちが私の母、兄弟である**と述べているが、これは直前の「良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞いてそれを保ち、忍耐して実を結ぶ人たちである」（8:15）と明らかに関わっている<sup>35</sup>。

## 結び

以上の釈義的検討から、この箇所全体（8:4-21）の統一的視点について、以下のようにまとめることができるであろう。

ルカは最初の種まきの譬え（8:4-15）をマルコのテキストに依拠しつつ編集的に構成しているが、「聞きなさい」（マコ4:3, 9）という言葉によって譬え本文を

34 ルカがイエスの母と兄弟たちに対するマルコの否定的なイメージを抑える仕方では彼らを描き出そうとしていることは明らかであるが、その一方で、イエスの母と兄弟たちが、神の言葉を聞いて行う者と見なされているわけではなく（M. S. ハイスター『ナザレのマリア』出村みや子訳、新教出版社、1988年、96-98頁や荒井献「マリア観の諸相」『「同伴者」イエス』新地書房、1985年、200頁に反対）、ましてや、彼らを「模範的な弟子」（Fitzmyer, op. cit., p. 723）と見なすことはできない。確かにルカは、誕生物語においてマリアを、天使の言葉を従順に受け入れた女性として描いており（1:38, 45; 2:19, 51参照）、その点を考慮するならば、マリアに関してはそのような想定も成り立つかもしれないが、イエスの兄弟たちがイエスの言葉に聞き従っていたことを示唆する記述は見られず、マリアとイエスの兄弟たちが熱心に祈っていた様子を伝える使徒行伝1:14の記述はイエスの死後のエピソードである。

35 ルカ8:18の「どう聞くべきかに注意なさい」も参照。

粹付けているマルコが「御言葉を聞く」ことに主眼点を置いているのに対し、ルカは「御言葉を聞く」ことをむしろ相対化し、解釈部分においても、焦点を種まく人からまかれた種そのもの（御言葉）へと移行させ、さらには、まかれた種の運命を聞き手の運命と同定することにより（12-14節参照）、聞き手に対して御言葉を聞くだけでなく、聞いた御言葉を守り、実を結ぶように促している（15節）。

これに続くともし火の譬え（8:16-18）も、ルカはマルコのテキストをもとに構成しているが、神の言葉の開示性を強調すると共に、譬えの適用句の直後に「どう聞くべきかに注意しなさい」（18a節）という言葉を加えることにより、神の言葉を単に聞くだけでなく、いかに聞くべきかという観点を強調している。まさに、ともし火の光は覆い隠されるのではなく、照らし出されるべきであるように、弟子たちは、神の言葉を聞くだけでなく、光としての神の言葉を「入って来る」外部の人々に伝えること（宣教活動）によって豊かな実を結ぶべきなのである。

最後のイエスの家族に関する段落（8:19-21）についても、ルカはマルコのテキストをもとに構成しているが、マルコ3:35の「神の意志を行う」を「神の言葉を聞いて行う」（21節）に修正すると共に、マルコにおいては一連の譬えの直前に置かれていたこの段落を、8:4以降の一連の譬えによる教えの結びに位置づけることにより、この箇所全体を「神の言葉を聞いて行うという統一的主题のもとに構成している。

このようにルカは、8:4-21全体を通して、神の言葉を聞くだけでなく行うことを強調しており、その主眼点を「聞くこと」から「行うこと」へと移行させている。この点は、具体的な行為を重視し、しばしば倫理的実践を要求するルカ福音書の特徴とも合致しており、同様の主題は、平地の説教末尾の「家と土台の譬え」（6:46-49）や後続の「真の幸い」についての教え（11:27-28）においても強調されている。